

ツール 14：プロブレム・ツリー

このツールの目的

課題または問題の原因と結果の構造的な分析を行う。

このツールを使うタイミング

プロブレム・ツリー分析は、計画策定プロセスにおいて非常に有用だ。このツールは、MSPの共通言語フェーズでの使用に適している。

プロブレム・ツリーとは

プロブレム・ツリー分析（状況分析または単にプロブレム分析とも呼ばれる）は、問題に関する原因と結果の詳細をマッピングすることにより、その解決法を見出しやすくしてくれる。マインドマップとも似ているが、より構造的な分析が可能である。

なぜプロブレム・ツリーを使うのか

プロブレム・ツリーという手法には、以下のような利点がある：

- 問題を管理可能かつ定義可能な大きさにブレークダウンしてくれる。これにより、各要素の明確な優先順位付けが可能となり、目標に注力できるようになる。
- その問題と、多くの場合相互に関係し、場合によっては矛盾する原因について、より深く理解できるようになる。これは、多くの場合、ウィン・ウィンの解決法を見出す最初のステップとなる。
- このツールは、中心となる課題と議論を特定してくれ、各ステージにおける政治的な関係者やプロセスが誰（何）であるかを把握するのに役立つ。
- 確固としたポジションを作り、相手を納得させる解決法を見出すために、さらなる情報や証拠、リソースが必要かどうかを把握するのに役立つ。
- 現在の課題（おそらく存在する課題や将来や過去の課題ではなく）について対応し、特定できる。
- 分析プロセスそのものが、多くの場合、理解や目的、アクションの共有化につながる。

プロブレム・ツリー分析 – ステップ・バイ・ステップ

プロブレム・ツリー分析は、6～8人の少人数のフォーカスグループで、フリップチャートまたはオーバーヘッドプロジェクターを用いて行うのが最適である。議論が進むにつれて、さまざまな要素を書き加えられるようにすることが重要である。

ステップ1：分析する問題または課題について議論し、合意する。プロブレム・ツリーを用いてブレークダウンできるため、広範な問題でよい。フリップチャートの中心にその問題または課題を書き入れ、これがツリーの「幹」となる。これが「中心的问题」となる。問題は、参加者全員が熱意をもって取り組める実際の問題でなければならない。一般的には、キーワードで表現するようにする。

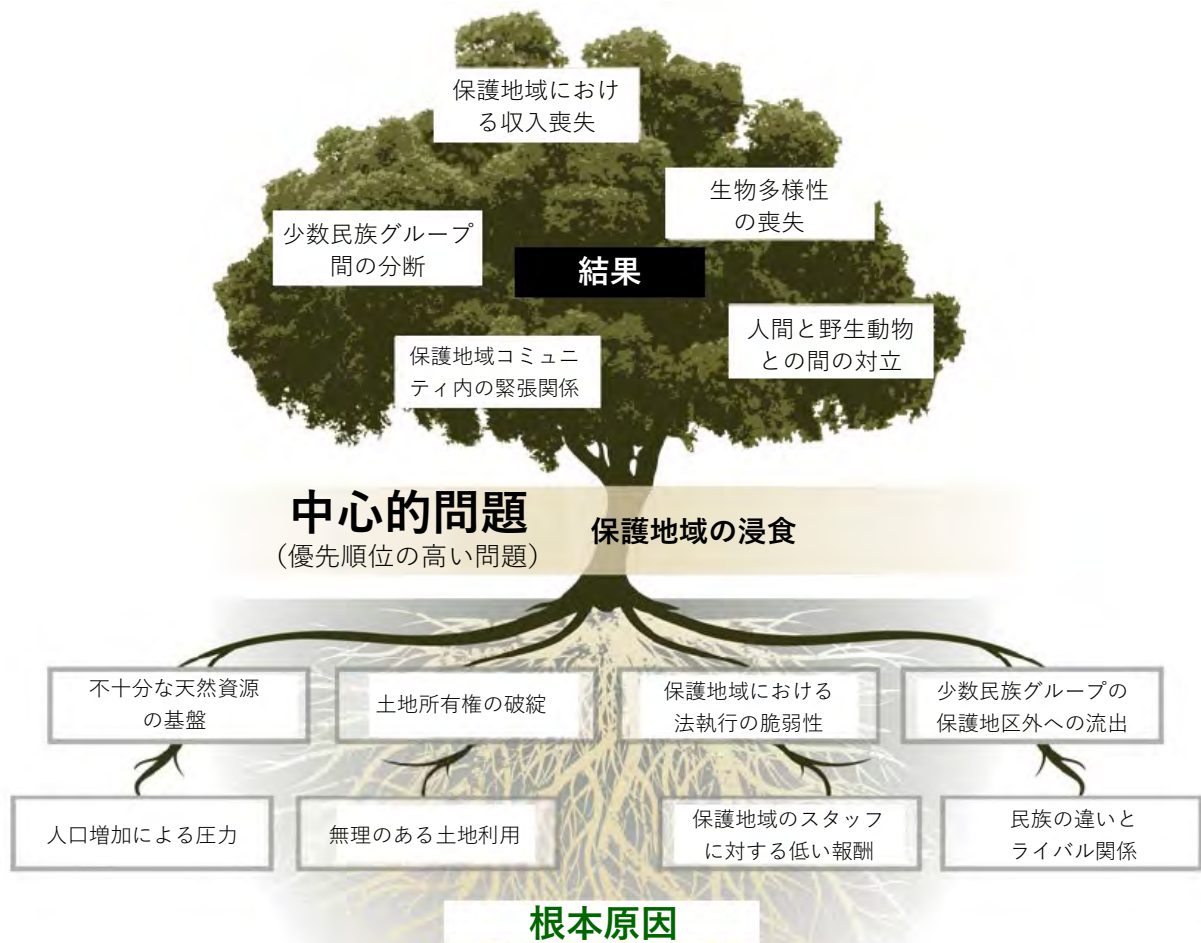
ステップ2：中心的な問題の原因を特定し（これらの原因が「根」となる）、次に問題の結果を特定する（これは「枝」となる）。この原因と結果は、個人で、あるいはペアになってポストイットまたはカードに書き入れ、原因と結果の流れに沿ってアレンジできるようにしてもよい。

このアクティビティの鍵となるのは、ツリーを作る過程で生まれる議論やディベート、対話だ。参加者が自分の気持ちや理由付けを説明できるよう時間を取り、そこで出てきた関連するアイデアやポイントをフリップチャート上に記録するようにする。その際、上に「解決策」「懸念」「ジレンマ」といったタイトルを書き、その下にそれぞれの項目を記録していくようにする。

議論する際には、以下のようなものが考えられる：

- これは現実を表しているだろうか？この問題についての、経済的・政治的・社会文化的側面は検討しただろうか？
- 原因と結果の中で、悪化しているもの、改善しているもの、同じ状態が続いているものはどれだろうか？
- 最も深刻な結果とは？最も懸念があるものは？今後の計画を考える上で、我々にとって最も重要な指標とは？
- 対応が最も容易な/最も困難な原因とは？どのような解決法やオプションが考えられるか？原因または結果に対応するために、あるいは解決法を生み出すために、政策変更が役立つ分野とは？
- 我々はどのような意思決定を行い、どのようなアクションを取ることで合意したのか？

プロブレム・ツリーの例



出典：www.iisd.org/csconservation/conflict_tree.aspx

バリエーション

オブジェクティブ・ツリー：プロブレム・ツリー分析に続き、問題それぞれを、ポジティブで望ましい結果に言い換えることも可能だ。その問題があたかもすでに対処されたものであるかのように、問題（プロブレム）だったものを目標（オブジェクティブ）のツリーに変えてしまうのだ。こうすることで、根本原因と結果は、根本解決法に変わる。この手法を通じ、主要プロジェクトや影響を及ぼす最初のスタート地点を早い段階で

把握することができる。フォースフィールド分析（ツール16）が有益な次のステップとなり得る。

オポチュニティ・ツリー：「問題」に注目するのではなく、機会（オポチュニティ）を分析するためにツリーを使うこともできる。これは、最初の質問を「何が問題で、何が根本原因なのか」から「うまく行っていることとは何で、その根本原因は何か」に変えることを意味する。これは、アプレシエイティブ・ストーリー・テリング（ツール6）後に行ってもよい。



さらに知りたい方は：

本セクションの解説は、以下をアレンジした：The ODI Toolkit, Successful Communication, A Toolkit for Researchers and Civil Society Organisations. www.odi.org/publications/5258-problem-treanalysis

オポチュニティ・ツリーは、以下をアレンジした： J. M. Chevalier and D. J. Buckles (2012). Participatory Action Research, Theory and methods for engaged inquiry. London, Routledge. [Publisher website](#)